

小谷山遠景

北近江を斜めに通り抜ける国道365号のちよūdなかほど。道路のそばまで裾野を広げる小谷山に気つくことなく行き過ぎる人はあるまい。東に延びる尾根上の城跡を訪ねれば、いくつも残る曲輪に、450年前の栄華が偲ばれる。

小谷の城に嫁したひと、生まれたひと、そのゆかりのひと…

特集 浅井家をめぐる女性たち

女という性ゆえ、正しい名前すら残すことはできずとも夫を支え、子を育て、世の中を動かす力をも秘めていたひとたち。彼女らが、北近江やその周辺に残した轍をたどり450年前を、手元に引き寄せてみたい。

本誌における表記について

・今号で取りあげた人物に複数の名称がある場合、取材記事においては、一般的に使われているものを使用し、浅井長政の長女は「茶々」、二女は「お初」、三女は「お江」としました。寄稿記事については、著者の判断に拠りました。
・今号で取りあげた人物の生没年、年齢などに諸説ある場合、小和田哲男著「戦国三姉妹物語」(角川選書)に拠りました。

総説

浅井家をめぐる女性たち

畑 裕子 日本ペンクラブ会員

小谷城を築城した亮政

浅井三代の初代亮政は浅井氏宗家である浅井直政の女、蔵屋の婿となる。当時北近江の名家京極氏は、高清の跡を長男の高延にするか二男の高慶にするか、家督争いで紛糾していた。大永3年(1523)、浅見氏や亮政をはじめ配下の国人(小領主)たちは、浅見氏を盟主として高延を推し、高慶を推す高清や上坂氏に勝ち、新たな当主として京極高延を擁立した。こうした中、大永4年、国人たちの中でナンバー2ともいえる亮政は彼らとの間にさらに力の差を見せる必要があった。

それが本格的な山城、小谷城の築城である。亮政は城の麓に築いた居館に衰退した主家京極高清・高延父子を招待して饗応し、力を見せつけた。そして翌年、浅見氏に不満を持つ国人と軍事行動を起こし、浅見氏を退け、盟主となるのである。

長政とお市の結婚

歴史の裏舞台から表舞台へと登場してくる浅井家の女性たち。そのきっかけとなったのはお市の方と長政の結婚である。亮政の死後、側室の子久政が家督を継ぐが、久政は外交で弱腰で初めから六角氏に屈服した。嫡男の

元服の際、六角義賢の賢の字をもらい、賢政と名乗らせ、また、六角氏の重臣平定武の娘を嫁に押し付けられた。賢政や家臣の一部はこうした久政のやり方に不満を抱き、久政を隠居させ、賢政が家督を継いだ。いわゆる永祿2年(1559)、久政の竹生島幽閉事件である。やがて久政は小谷城に帰城するが、この時、仲を取り持っていたのが久政の正室阿古(井口殿)だといわれている。

浅井氏が江北の雄となつたのは、永祿5年(1564)旬、六角氏との野良田の戦い以降とされている。その後、北近江の城をめぐり、

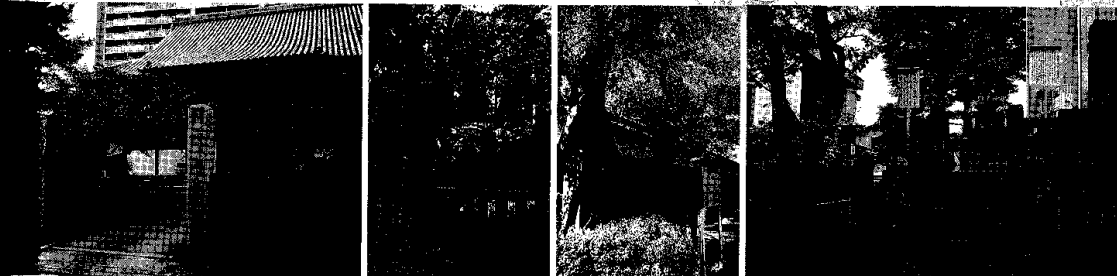


畑 裕子 (はた ゆうこ) 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文学科卒業。日本ペンクラブ会員。滋賀県芸術賞、朝日新人文学賞、地上文学賞、滋賀県文化奨励賞などを受賞。おもな著書に、『面・妄幻』(朝日新聞社)『近江百人一首を歩く』(サンライズ出版)『柳子の家』(集人社)『わたし猫語がわかるのよ!』(光文社・共著)『近江戦國の女たち』(サンライズ出版)。ほか新聞、雑誌に執筆。

畑が広がる清水谷への入口付近



▲浅井長政夫人織田氏(滋賀県立安土城考古博物館 所蔵)



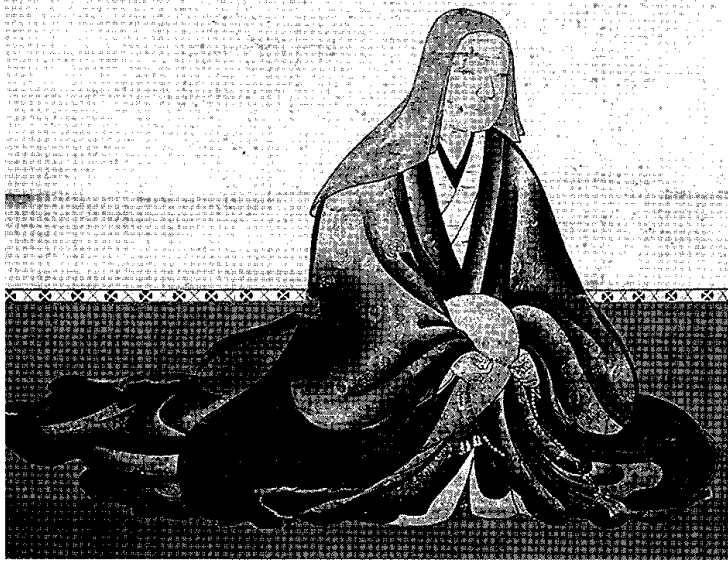
▲井三代の墓がある徳勝寺

小谷城址にある浅井家の墓 MARIAが嫁いだ京極家の 菩提寺徳源院

福井市西光寺にあるお市の方らの墓

流れに任せながら 血を繋いだ末娘

長政の三女 お江 二男 万菊丸



▲徳川秀忠室（浅井氏）（東京大学史料編纂所蔵複製・京都霊源院原蔵）

浅井家の三女・お江は、湖北においてはほとんど痕跡のない女性だ。3度目の結婚で徳川秀忠の正室となつてからは、日本の歴史上に名を残すことになるが、それまでの彼女の姿を捉える手がかりは、なかなか見つからない。ところが、歴史に名を残すことになかった二男・万菊丸については、落城時に救出した家臣の子孫が地元におられる。この項では、この二人の子ともたちについて記すことにする。

3度目の結婚で徳川家に

浅井家の家臣屋敷や寺院、そして一家が暮らした屋敷などは、小谷山の尾根にはさまれた清水谷にあった。今秋、児童館を改修してオープンした小谷城戦国歴史資料館（62頁で紹介）から、なだらかな谷筋の道を10分ほど歩くと「徳昌寺跡」の表示が見える。秀吉の城下町形成とともに長浜に移った徳勝寺のあったところだ。御屋敷跡はそこからもう少し上がった谷のつきあたり。広い平坦地は木立に覆われているが、ここにお市の方や子どもたちが住まいした居館があったと伝わる。安らかな日々を送つた時代には、谷を城下ま

万菊丸を助け出した中島左近

小谷城ふるさと祭りのステージで、寸劇の配役が紹介されていた。「浅井長政、○○○」。「朝倉義景、△△△△」と、武将とキヤストが読み上げられるなかで、「中島左近、中島左近！」。司会者が間違えたのではない。中島左近役は、その子孫である中島左近さんが演じたのだ。

長政には、5人の子ともがいたとも伝わる。小谷城落城時、お市の方とともに城外へ逃げた茶々、お初、お江の三姉妹、敵に見つかり無惨な最期を遂げた長男・万福丸。そしてもう一人が、末子の二男・万菊丸である。万菊丸は、地元の家臣・中島左近、小川伝四郎、そして乳母の3人によつて救出されたという話が残っている。中島家は、今も代々家系を継ぎ、同時に、当時の逃避行の様子も口伝で伝わっている。

お江もそうであるように、万菊丸の生年は定かでない。母親がお市の方であったかどうか、わからない。「そのわからない、という



▲小谷城ふもとの清水谷の徳昌寺跡。御屋敷跡は、ここからもう少し上つたところ

のときお江はおなかに子どもを宿していた。女の子を出産するも、文禄4年にはその完子を姉の茶々にあずけ、徳川家康の嫡子・秀忠と3度目の結婚。このときお江は23歳、秀忠は初婚の17歳だったという。自分の意思を持つことなど許されない、戦略のための持ち駒に甘んじていたお江だったが、この結婚によって日本の歴史の要のひとつとなる場所に落ち着くことになる。豊臣家2代目の秀頼の妻となる千姫、後の3代将軍家光、天皇家へ嫁ぐ和子など、2男5女を授かったのだ。



▲自作の甲冑に身を包んだ中島左近さん

頭造 製造 餅製 観世音最中 くるみゆべし 季節の和菓子

押谷製菓舗
長浜市川道町
TEL 0749(72)2043

で下りてきた日もあったのだろう。

しかし、三女のお江には、小谷での思い出など何もなかったのかもしれない。その出生は、小谷落城の天正元年（1573）とも、その数年前とも伝わる。落城後の彼女の足どりは、姉たちと同様、いくつもの説によって伝えられている。

お江は、3度結婚している。いずれも秀吉によるはからいである。最初は天正12年（1584）、尾張大野郡の城主・佐治与九郎に嫁ぐが、すぐに離縁させられる。結婚の期間は数年とも数ヶ月ともいわれ、その理由もいくつかあるようだが、いずれにせよ、彼女自身が夫をイヤになって別れたわけではない。その前に、与九郎を好きになって嫁いだわけでもない。いつも背後には略略的な思惑がうごめいていた。

2度目の結婚は、文禄元年（1592）、秀吉の養子・小吉秀勝と。今度はたった4ヶ月で秀勝が戦病死してしまう。ところが、その事実も含め、私が、父親や祖母から聞いてきた先祖からの伝承としてお話させてもらいます」と断つて、中島左近さん（76歳）は語ってくれた。

当時、中島左近は、地元二俣、丁野の豪族だった。兄の宗左エ門直親は浅井家の家臣として仕えており、この戦さのときには、虎御前山の北、丁野山の東側の小山の上に砦を築いていた。しかし、信長軍の攻撃によつて戦死。そこで長政は、弟である左近に万菊丸を託したという。

「左近は姉川の合戦にも参加していないのですが、名字帯刀を許され、侍扱いをされていたようです」

かくて左近は、伝四郎、乳母とともに万菊丸を連れての逃避行に出る。行き先は決まっていた。当時、信長の抵抗勢力として力があった湖北有力寺院による十ヶ寺連盟の筆頭だった福田寺（米原市）である。しかし、一行は直接福田寺へは向かわなかった。まず北隣の集落、上山田の礼信寺に匿われ、その後、山伝いに北上。びわ湖の北端を回つて葛籠尾崎の菅浦の集落にある安相寺に着いた。

「菅浦は、三方が山で残りの一方は湖に面している、隠れるのにいい土地だったんですよ。そこから4人は、夜陰に紛れて舟で長浜の下坂に向かうんです。そして葦原の茂みに隠れて陸の様子を窺っていたのですが、敵の姿が見えたりしたのでしよう、上陸は無理だということで菅浦へ引き返し、そして、そ